



2025年12月26日

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

2025年度 第2回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果

今後の見通し(2026年1月～6月)のポイント

海況

黒潮は、3月までC型^(※1)で推移し、その後はN型^(※1)基調となる。

沿岸水温は、薩南～紀伊水道外域は「平年並」^(※2)～「高め」^(※2)、熊野灘～相模湾は「低め」^(※2)～「平年並」で暖水波及時には「やや高め」^(※2)～「高め」、伊豆諸島海域は3月まで「低め」^(※2)～「やや低め」^(※2)でその後は「やや低め」～「高め」、房総海域～常磐南部海域は「平年並」～「高め」で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

C型：八丈島の南を通過

N型：八丈島の北を通過、南端が北緯33度以北

※2 平年並=平年値±0.5℃程度、

やや高め・低め=平年値±1.0℃程度、

高め・低め=平年値+/-1.5℃程度、

ただし、鹿島灘～常磐南部海域の基準は次頁末尾を参照のこと。

漁況（来遊量予測）

マイワシ

相模湾以西は前年並～上回る海域が多く、房総以北は前年を下回る。

カタクチイワシ

低調であった前年並。

ウルメイワシ

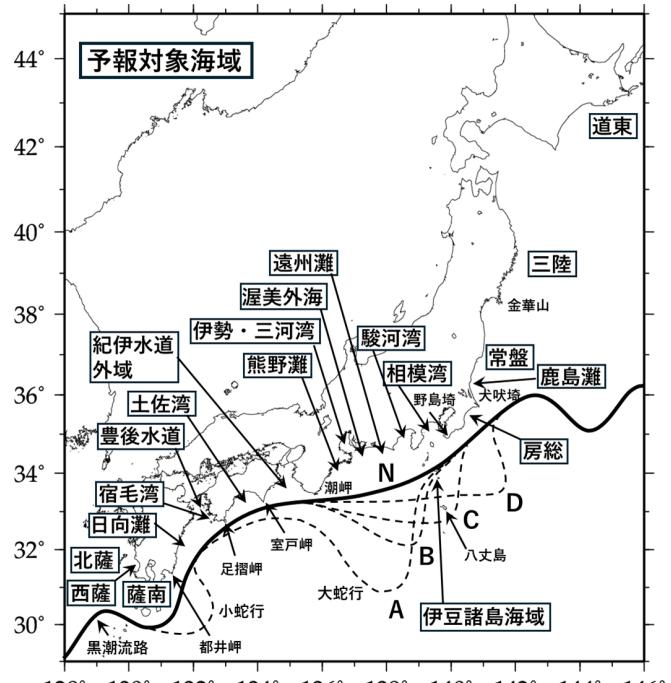
海域によって異なるが、全体として低調であった前年を上回る。

マアジ

海域によって異なるが、全体として前年並。

マサバ・ゴマサバ

マサバ、ゴマサバともに低調であった前年並。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当

漁況：浮魚資源部（横浜） 大島、渡部、木下、日野、木皿、井須、上村

海況：海洋環境部（横浜） 亀田、伊藤

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2026年1月～6月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・都井岬沖では、2月中旬～3月上旬および4月～5月上旬に離岸傾向となる。
- ・足摺岬～室戸岬沖では、接岸傾向で推移するものの、小蛇行の東進に伴い一時的に離岸傾向となる。
- ・潮岬沖では、接岸傾向で推移する。

◎潮岬以東

- ・3月までO型で推移し、その後はN型基調となる。
- ・遠州灘沖では、3月までは離岸傾向で推移し、その後は接岸傾向となる。
- ・房総沖では、接岸傾向で推移するものの、野島崎沖では離岸することがある。

(2) 薩南～房総海域

- ・潮岬以西は、一時的に黒潮系暖水が波及する。
- ・熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は、黒潮の接近や黒潮系水の波及に伴い暖水に覆われる。
- ・伊豆諸島南部海域は、3月までは概ね冷水に覆われるが、その後は暖水域となる。
- ・房総沖は、断続的に黒潮系暖水の影響がみられる。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・断続的に黒潮系暖水の影響がみられる。

(4) 沿岸水温

- ・薩南～紀伊水道外域は、「平年並」～「高め」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、「低め」～「平年並」で推移し、暖水波及時には「やや高め」～「高め」となることがある。
- ・伊豆諸島北部海域は、3月までは「低め」～「やや低め」、4月以降は「やや低め」～「平年並」で推移する。
- ・伊豆諸島南部海域は、3月までは「低め」～「やや低め」、4月以降は「やや高め」～「高め」で推移する。
- ・房総海域～常磐南部海域は、「平年並」～「高め」で推移する。

※ 平年並=平年値±0.5°C程度、(やや高め、やや低め)=平年値±1.0°C程度、

(高め、低め)=平年値±1.5°C程度、(極めて高め、極めて低め)=平年値±2.5°C以上

(鹿島灘～常磐南部海域では、平年並=平年値±1.5°C程度、(やや高め、やや低め)=平年値±1.6～3.9°C程度、(高め、低め)=平年値±4.0～6.0°C程度、(極めて高め、極めて低め)=平年値±6.1°C以上)

経過(2025年7月～12月) (注: 経過は図2を参照のこと)

(1) 黒潮

- ・7月～11月中旬にかけてC型基調で推移し、その後はB型流路となった。
- ・7月上旬～8月中旬、小蛇行の発達・東進に伴い都井岬沖～室戸岬沖で大きく離岸した。
- ・8月中旬、小蛇行の東進に伴い潮岬沖で離岸し、9月中旬には一時的なA型流路となった。
- ・10月以降は都井岬沖～潮岬沖では接岸傾向で推移した。
- ・7月下旬～11月中旬、房総沖では離岸傾向で推移し、その後は接岸傾向となった。

(2) 薩南～房総海域

◎薩南海域

- ・黒潮北縁は、7月～8月は「平均的な位置」、9月は「接岸」、10月～11月は「平均的な位置」で推移した。

◎潮岬以西

- ・都井岬沖では、7月～9月は離岸傾向、10月以降は接岸傾向で推移した。
- ・足摺岬沖では、7月～8月上旬は「著しく離岸」、8月中旬以降は「接岸」で推移した。
- ・室戸岬沖では、7月下旬～8月中旬は「著しく離岸」、8月下旬以降は「やや離岸」～「接岸」で推移した。
- ・潮岬沖では、接岸傾向で推移し、8月中旬に一時的に離岸した。

◎潮岬以東

- ・熊野灘～遠州灘、駿河湾～相模湾では、断続的に黒潮系暖水が波及した。
- ・7月～11月中旬、黒潮は八丈島の東側を通過しながら野島崎沖を北上した。
- ・11月下旬以降、黒潮は潮岬沖から概ね東向きに流れ、御蔵島付近から北東に流れた。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・黒潮系暖水の影響が断続的にみられた。

現況（2025年12月22日現在）

(1) 黒潮

- ・B型流路である。
- ・御蔵島付近を北東へ流れている。

(2) 薩南～房総海域

◎潮岬以西

- ・都井岬沖～潮岬沖で接岸している。

◎潮岬以東

- ・相模湾に暖水が波及している。
- ・伊豆諸島海域は、暖水に覆われている。
- ・房総沖で接岸している。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・黒潮系暖水に覆われている。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、都井岬沖～御前崎沖では川合（1972；海洋物理II、東海大学出版会）、野島崎沖では清水（1989；千葉水試研報）に準じた。

※ 黒潮流型の分類は、吉田ほか（2006；海の研究）に準じ、さらに詳細な分類には海上保安庁の定義（<https://www1.kaiho.mlit.go.jp/KANKY0/KAIY0/qboc/exp/yougo.html>）を補助的に用いた。

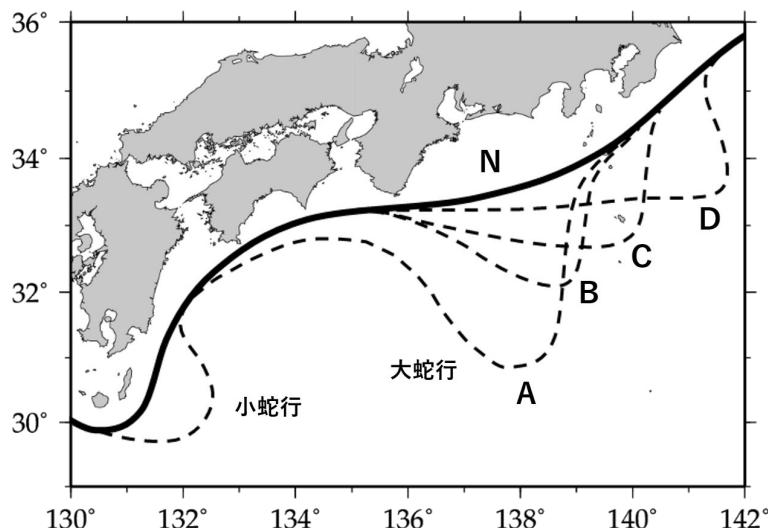


図1 黒潮流型の分類

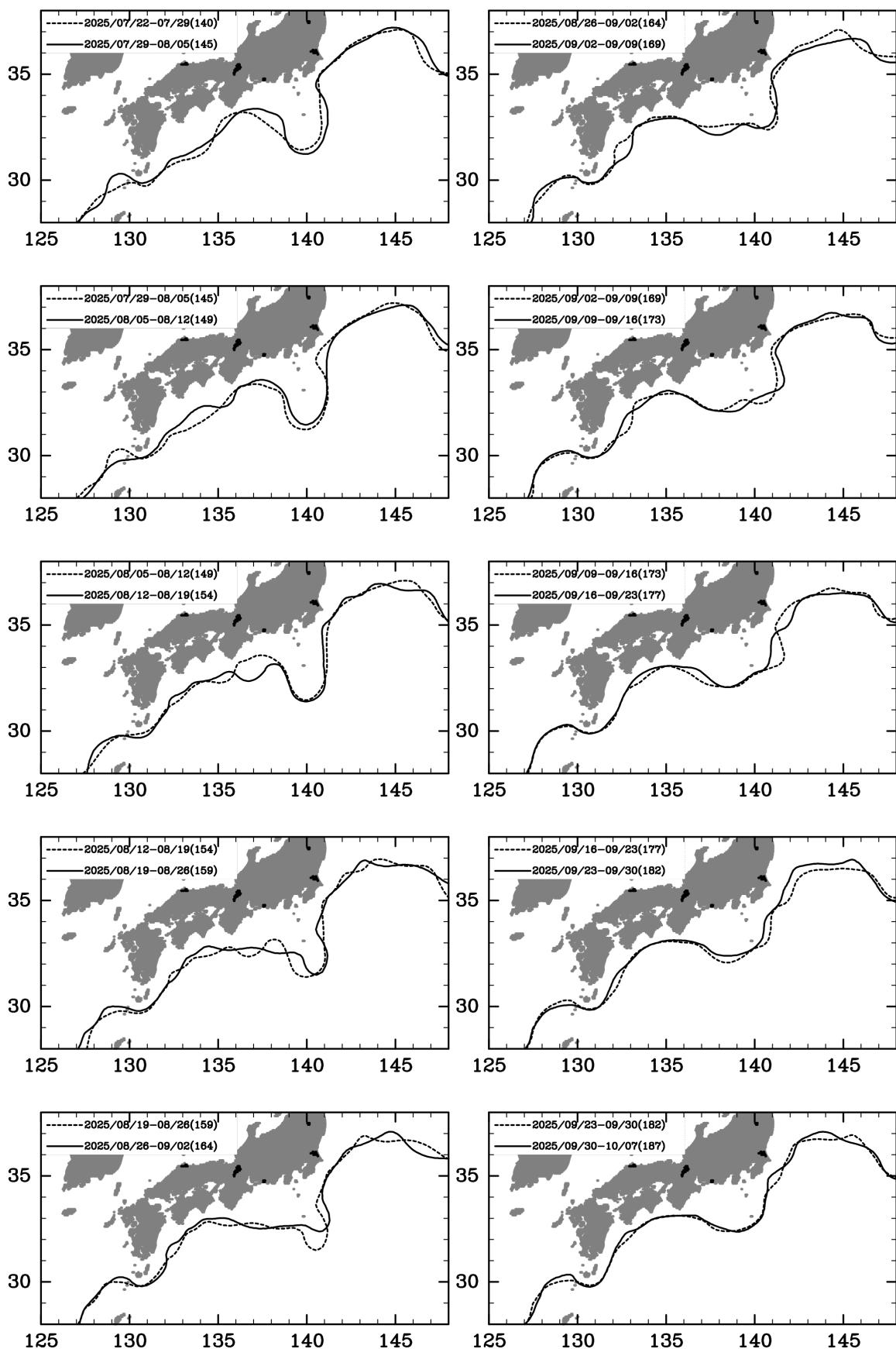


図2 黒潮流軸のパターン
(2025年7月～9月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

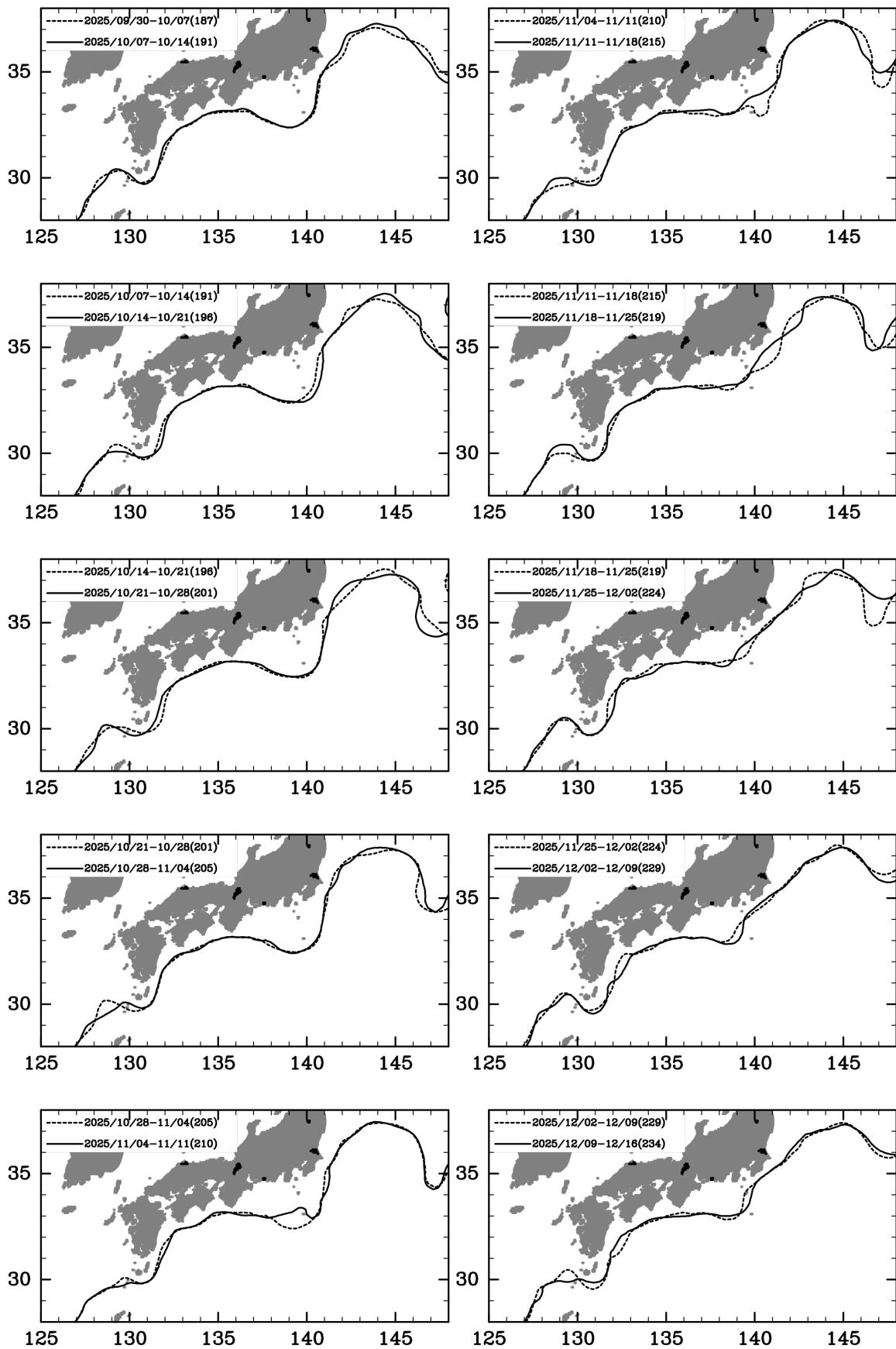


図2(つづき) 黒潮流軸のパターン

(2025年10月～12月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2026年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2026年級群）、1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）、3歳魚（2023年級群）、4歳魚（2022年級群）、5歳魚（2021年級群）以上。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～日向灘では前年並。豊後水道南部西側では前年を上回る。豊後水道中南部東側では前年並～下回る。宿毛湾～熊野灘では前年を上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：北薩～豊後水道南部西側では、期前半は15cm～20cm前後（1歳以上）、期後半は7cm～13cm前後（0歳魚）主体。豊後水道中南部東側では、5cm～10cm前後（0歳魚）が主体。宿毛湾～熊野灘では、14cm未満（0歳魚）および14cm以上（1歳以上）が漁獲される。

2. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：伊勢・三河湾では予測不可。駿河湾、相模湾西部では前年並～上回る。相模湾東部では前年並。

(2) 漁期：伊勢・三河湾では6月以降、駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：駿河湾、相模湾西部では、期前半は15cm～20cm前後（1歳魚～3歳魚）、期後半は12cm以下（0歳魚）主体。相模湾東部では17cm以上（1歳以上）主体。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：1そうまきの漁場は、1月～5月は犬吠埼沖～三陸南部海域で形成され、6月以降は犬吠埼沖～三陸北部海域、6月下旬には道東海域でも形成される。2そうまきの漁場は、期を通じて房総海域～鹿島灘に形成される。定置網は、仙台湾～三陸南部海域において、期を通じて入網がみられる。

(3) 魚体：10cm～15cm前後（1歳魚）、14cm～18cm前後（2歳魚）、15cm～19cm前後（3歳魚）、17cm～21cm（4歳魚）、19cm以上（5歳以上）。まき網では2歳魚～4歳魚主体。

漁況の経過（2025年7月～11月）および見通し（2026年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1980年代は1,000万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入つて急減し、2002年以降2009年まで10万トン前後の低い水準で推移した。その後、比較的良好な加入が続いたこと、および漁獲圧が低下したことにより資源量は増加し、2020年には500万トンを上回った。しかしその後、加入量は減少傾向にあり、2024年の資源量は400万トンと推定された（2025年度資源評価）。

2021 年級群（5 歳魚）以上は、最近 10 年（以下、近年）において高い加入量の年級群で構成されている。2025 年における 5 歳以上としての漁獲状況は、前年を下回った。5 歳以上の推定残存資源量は前年を下回っている。

2022 年級群（4 歳魚）は、加入量が 943 億尾と推定されており、2021 年級群と同程度の水準となっている。2025 年における 3 歳魚としての漁獲状況は、前年を上回った。2022 年級群の推定残存資源量は 2021 年級群の同時期を下回っている。

2023 年級群（3 歳魚）は、加入量が 332 億尾と推定されており、2022 年級群を下回る水準となっている。2025 年における 2 歳魚としての漁獲状況は、前年を下回った。2023 年級群の推定残存資源量は、2022 年級群の同時期を下回っている。

2024 年級群（2 歳魚）は、加入量が 564 億尾と推定されており、2023 年級群を上回る水準となっている。2025 年における 1 歳魚としての漁獲状況は、前年並であった。2024 年級群の推定残存資源量は、2023 年級群の同時期を上回っている。

2025 年級群（1 歳魚）は、2025 年における 0 歳魚としての漁獲状況（主に西日本海域）は、前年を上回った。一方で、沖合域においては、2025 年 6 月～7 月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所）および 9 月～10 月の北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所）の CPUE はともに前年を下回った。現時点では不確実であるが、近年は沖合回遊群が資源の中心であることを踏まえ、2025 年級群の加入量は前年を下回る水準と考えられる。

2026 年級群（0 歳魚）については、現時点ではその水準を予測できない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

（1）北薩～熊野灘（まき網、定置網）

北薩～熊野灘での 7 月～11 月の漁獲量は 3.8 万トンと前年同期（0.6 万トン）を大きく上回った。（漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値）

・来遊量：北薩、薩南海域では、1 月～4 月は 1 歳魚（2025 年級群）、2 歳魚（2024 年級群）が、5 月以降は 0 歳魚（2026 年級群）が漁獲の主体となる。3 月～4 月の漁獲量と翌年上半年の漁獲量の関係から、来遊量は前年並と予測される。

日向灘では、期前半は 1 歳魚、2 歳魚が、後半は 0 歳魚が漁獲の主体となる。前期の漁獲状況および近隣県の来遊状況から、来遊量は前年並と予測される。

豊後水道南部西側では、期前半は 1 歳魚、2 歳以上が、後半は 0 歳魚が漁獲の主体となる。今期の漁獲の主体となる 2025 年級群の 2025 年 7 月～11 月のまき網における漁獲状況は前年を上回ったことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道中南部東側では、0 歳魚が漁獲の主体となる。2025 年 7 月～11 月の漁獲状況は前年を上回っているものの、近年の漁獲傾向から、今期の来遊量は前年並～下回ると予測される。

宿毛湾、土佐湾では、0 歳魚および 1 歳以上が漁獲される。2025 年 7 月～11 月の漁獲状況は、今期の漁獲の主体となる 2025 年級群を主体にまき網、定置網とともに前年を上回ったことから、来遊量は前年を上回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、0歳魚が漁獲の主体となる。近年の漁獲傾向から、来遊量は低調であった前年を上回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、定置網は2016年以降、低調に推移している。一方、黒潮が潮岬沖を接岸基調で推移した場合、マイワシの漁場形成条件は良いと考えられる。以上より、来遊量は低調であった前年を上回ると予測される。

熊野灘では、1歳以上が漁獲の主体となる。2025年7月～11月の漁獲量は2025年級群を主体に前年を大きく上回ったことから、今期においても1歳魚となった同年級群を主体に一定の漁獲が見込まれる。また、黒潮大蛇行が解消され、産卵親魚の来遊条件が好適化する可能性も考えられる。以上より、来遊量は前年を上回ると予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、北薩～豊後水道南部西側では、期前半は15cm～20cm前後の1歳以上、期後半は7cm～13cm前後の0歳魚が主体となる。豊後水道中南部東側では、5cm～10cm前後の0歳魚が主体となる。宿毛湾～熊野灘では、14cm未満の0歳魚および14cm以上の1歳以上が漁獲される。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

伊勢・三河湾～相模湾での7月～11月の漁獲量は、1.6万トンと前年同期（0.2万トン）を大きく上回った。

- ・来遊量：伊勢・三河湾では、資源保護のため2025年1月～6月の間は出漁しなかったため、来遊水準の比較はできない。

駿河湾、相模湾西部では、期前半は1歳魚～3歳魚（2025年級群～2023年級群）が主体となり、期後半は0歳魚（2026年級群）が主体となる。今期は、南下回遊する産卵親魚が主に漁獲されると考えられる。マイワシ太平洋系群の親魚量と静岡県の1月～6月の漁獲量の関係から推定される来遊量は前年を上回る。一方、黒潮の房総半島への接岸状況も考慮して、来遊量は前年並～上回ると予測される。

相模湾東部では、マイワシ太平洋系群の資源量が減少傾向であり、黒潮大蛇行の終了によって伊豆諸島海域における産卵親魚の行動が変化する可能性がある。したがって、来遊量は前年並と予測される。

- ・漁期：伊勢・三河湾は6月以降、駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、駿河湾、相模湾西部では、期前半は15cm～20cm前後の1歳魚～3歳魚が主体となり、期後半は12cm以下の0歳魚が主体となる。相模湾東部では17cm以上の1歳以上が主体となる。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

道東海域のまき網漁業は、6月下旬から10月まで操業が行われ、漁獲量は16.0万トンと前年同期（20.6万トン）を下回った。房総～三陸海域のまき網漁業の7月～11月の漁獲量は、5.6万トンと前年同期（1.5万トン）を上回った。房総以北の定置網等は、7月～11月の漁獲量は1.3万トンと前年同期（2.5万トン）を下回った。

- ・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、2歳魚～4歳魚（2024年級群～2022年級群）が主体

となる。

資源状態を基にすると、3歳以上の来遊量は前年を下回ると考えられる。2歳魚は、加入量が前年を上回る水準であることから、来遊量は前年を上回ると考えられる。1歳魚（2025年級群）は、現時点では不確実であるが、沖合域での調査結果から来遊量は前年並～下回ると考えられる。以上より、全体としての来遊量は、前年を下回ると予測される。ただし漁獲量は、まき網の操業状況に左右される。また、仙台湾～三陸南部海域の定置網では前年を下回ると予測される。

・漁期・漁場：1 そうまきの漁場は、1月～5月は犬吠埼沖～三陸南部海域に形成される。6月以降は犬吠埼沖～三陸北部海域、6月下旬には道東海域でも漁場が形成される。2 そうまきの漁場は、期を通じて房総海域～鹿島灘に形成される。定置網は、仙台湾～三陸南部海域において、期を通じて入網がみられる。

・魚体：近年および直近の出現状況から、1歳魚は10cm～15cm前後、2歳魚は14cm～18cm前後、3歳魚は15cm～19cm前後、4歳魚は17cm～21cm前後、5歳以上は19cm以上。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2026年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2026年級群）、1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南では低調であった前年並。日向灘～土佐湾では前年を下回る。紀伊水道外域西部では低調であった前年並。紀伊水道外域東部では主たる漁獲対象ではない。熊野灘では低調であった前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：0歳魚、1歳魚が主体。体長は13cm以下。

2. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：伊勢・三河湾では予測不可。相模湾西部では前年並。相模湾東部では低調であった前年を上回る。

(2) 漁期：伊勢・三河湾では6月以降、相模湾では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：8cm～12cmの1歳魚が主体。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総海域では低調であった前年並。三陸南部海域～仙台湾では前年並～上回る。常磐海域、三陸北部海域および道東海域では、主たる漁獲対象とならない。

(2) 漁期・漁場：房総海域の2そうまきでは期を通じて漁獲される。三陸南部海域～仙台湾の定置網では1月に終漁し、4月に初漁となる。1そうまきの主な漁獲対象にはならない。

(3) 魚体：9cm～12cmの1歳魚を主体に、10cm～13cmの2歳魚が漁獲される。

漁況の経過（2025年7月～11月）および見通し（2026年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の資源量は、2002年の291万トンをピークに減少傾向に転じ、2018年に9.3万トンの最小値となった後、増加に転じて2024年は29.9万トンと推定された（2025年度資源評価）。資源動向は親魚量の最近5カ年の推移から増加傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく、資源状態に応じて黒潮親潮移行域まで広く分布する。

2025年度資源評価に基づくと、2024年級群（2歳魚）の加入量は419億尾と推定され、2023年級群の加入量を上回った。2025年における1歳魚としての漁獲状況は前年を下回った。ただし、房総海域と伊勢・三河湾などでは豊富に来遊していたマイワシを狙う操業が影響したと考えられる。これらのことから、残存資源量の水準を推測することは難しい。

2025年級群（1歳魚）は、シラスや0歳魚として主産卵場である東海海域を中心に7月以降に漁獲され、2025年のその漁獲量は前年並であった。2025年1月～6月の産卵量（I～IV区計）は2,888兆粒で、

前年同期の1,576兆粒を上回った。水産資源研究所が実施した沖合域の調査船調査では、2025年6月、7月における北西太平洋北上期浮魚類資源調査（以降、北上期調査）の推定0歳魚CPUE（全測点の平均CPUEで暫定値。以下同様）は依然として低水準で、前年を下回った。これらのことから、不確実ではあるが、2025年級群は2024年級群と同程度の加入量であり、残存資源量も同程度の水準であると推測される。

2026年級群（0歳魚）は、現時点でその加入量水準を推測することは難しい。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

・来遊量：北薩～薩南海域では、近年カタクチイワシの漁獲量は減少傾向にあり、2025年の7月～11月の漁獲量も前年を大きく下回って推移している。このことから、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

日向灘では、近年は大羽群の漁獲がほとんどなく、今期も沿岸発生群が主体になると考えられる。宮崎県における2025年7月～11月の漁獲量は前年を下回っている。また、近隣県の来遊状況も考慮すると、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、2025年7月～11月の水揚げ主体は0歳魚であった。今期はこれらが1歳魚（2025年級群）として来遊する可能性がある。0歳魚（2026年級群）の来遊量は現段階では予測困難であるが、2025年7月～11月のまき網水揚量が前年同期を下回ったことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道東側では、5月頃から漁獲対象となるカタクチシラスの漁獲量が前年を大きく下回った。このことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾・土佐湾では、1月～6月の宿毛湾中型まき網水揚量と前年10月～11月の宿毛湾中型まき網および日向灘まき網の水揚量合計との間に、有意な正の関係が見られる。2025年10月～11月の宿毛湾中型まき網および日向灘まき網の水揚量合計は前年同期を下回り（90.5トン）、この関係式から今期の水揚量は399.4トンと推定される。この値は前年同期の実績692.2トンを下回ることから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、紀伊水道外域の定置網において、被鱗体長5cm～10cmの1歳魚主体に混獲される。2025年7月～11月の0歳魚の漁獲量は前年同期を下回っているが、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。

紀伊水道外域東部では、成魚は主な漁獲対象ではない。

熊野灘では、冬季に来遊する魚群は、前年夏秋季の漁獲対象とは異なり、黒潮親潮移行域から大規模回遊を行う群れと考えられ、漁獲動向も前年夏秋季とは連動しない。北上期調査の0歳魚のCPUEは低水準で推移していることから、今期の来遊量は低調であった前年並と予測される。なお、熊野灘にサバ類やマイワシの産卵回遊群の来遊が無く、カタクチイワシの産卵回遊群の来遊があった場合は漁業の主対象種となり、ややまとまって漁獲される可能性がある。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：0歳魚、1歳魚が主体。体長は13cm以下。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：伊勢・三河湾では、2025年は資源保護のため6月まで出漁しておらず比較できる情報がないため予測できない。ただし、カタクチイワシ太平洋系群の資源量は増加傾向であり、愛知県沿岸部および内湾への来遊は期待される。

相模湾西部では、例年定置網で僅かに漁獲される程度である。漁獲対象となる1歳魚（2025年級群）の資源量は前年に引き続き低水準と推測されることから、来遊量は前年並と予測される。

相模湾東部では、カタクチイワシの漁獲量は近年非常に少なく、2024年は過去10年で最低の漁獲量46トンであった。2025年1月～11月の漁獲量は52トンで2024年よりは多いが、平年比（過去5年平均226トン）で23%と少ない。今期の来遊量は、カタクチイワシ太平洋系群の資源量が増加傾向にあることから、低調であった前年を上回ると予測される。

・漁期：伊勢・三河湾では6月以降、相模湾では期を通じて漁獲される。

・魚体：8cm～12cmの1歳魚が主体。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：房総海域では、1歳魚（2025年級群）が主体で、2歳魚（2024年級群）が混じる。1歳魚は秋季から当該海域に滞留する群と冬季以降に三陸海域以北から南下する群が漁獲対象になる。滞留群は、2025年10月～11月の千葉県主要港における0歳魚の水揚量が前年を下回ったことから、今期の来遊量は低調であった前年を下回ると推測される。南下群は、2025年秋季以降に0歳魚主体で漁獲されており、11月までの漁獲量は低調な前年並であった。FRA-ROMS IIによると、2025年12月下旬には三陸海域～鹿島灘における沿岸域の水温が前年同期よりも大きく低下すると予測されており、前年よりも房総海域まで南下しやすい海洋環境になる可能性がある。したがって、今期の1歳魚の来遊量は、来遊主体になると推測される南下群の動向から、低調であった前年並と予測される。2歳魚は、2025年12月上旬時点では三陸海域以北における漁獲がほとんど無いため、来遊量は低調であった前年並と予測される。以上より、近年の主体である1歳魚の来遊量を反映して、全体としても低調であった前年並と予測される。

常磐海域では、2025年7月～11月の北部太平洋まき網漁業協同組合連合会集計のせぐろ陸揚げ量は前年同期に比べて減少した。来遊量については、茨城県での水揚げが2017年3月以降ないこと、1そうまきは周年サバ類やマイワシを漁獲対象とすることから、まとまった漁獲はなく、予測は困難である。

三陸南部海域～仙台湾では、釧路水産試験場が2025年9月に道東沖で行った調査船調査においてカタクチイワシが前年並の水準で漁獲されており、青森県のまき網でも2025年10月～11月に前年並の水揚げがあったことから、1月には前年並の南下来遊が期待される。また、今期は、前年同様に黒潮続流が仙台湾付近まで北上しないと見込まれることから（FRA-ROMS II）、2月以降は水温低下に伴い宮城県沿岸から魚群が南下すると推測される。これらのことから、来遊量は低調であった前年並と推測される。しかし、前年よりも高水温となれば宮城県沿岸への滞留期間が長くなり、前年を上回る可能性もある。以上のことから、今期の来遊量は前年並～上回ると予測される。

三陸北部海域では、まとまった漁獲はない。

道東海域では、2021 年以降の釧路水産試験場の調査船調査結果から、当海域におけるカタクチイワシの来遊量が増加傾向にあると考えられるため、予測対象期間内に道東海域に来遊する可能性がある。しかし、予測対象期間内に操業する沿岸漁業やまき網漁業では、マイワシを中心とした漁獲が行われると考えられるため、本種を対象とした漁獲が行われる可能性は低い。

- ・漁期・漁場：房総海域の 2 そうまきでは期を通じて漁獲される。三陸南部海域～仙台湾の定置網では 1 月に終漁し、4 月に初漁となる。1 そうまきでは主な漁獲対象にはならない。
- ・魚体：9 cm～12 cm の 1 歳魚を主体に、10 cm～13 cm の 2 歳魚が漁獲される。

ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2026年1月～6月）

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0歳魚（2026年級群）、1歳魚（2025年級群）以上。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

(1) 来遊量：北薩～薩南海域および日向灘では前年並。豊後水道南部西側では前年を下回る。豊後水道東側では前年並。宿毛湾・土佐湾および紀伊水道外域東部では前年を上回る。紀伊水道外域西部および熊野灘では前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：前半は1歳魚（15cm～20cm）が主体、後半に0歳魚（15cm以下）が加入する。

漁況経過（2025年7月～11月）および見通し（2026年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

太平洋および瀬戸内海における漁獲量（農林統計）は、2015年に4.9万トンと過去最高となったが、2016年以降の漁獲量は減少傾向に転じ、2018年以降は概ね3万トン以下であった。2024年の漁獲量暫定値は2.5万トンであった。余剰生産モデルにより算出された資源量指標値（平均値を1とする相対値）は、1979年以降緩やかに増加して1997年に0.95を示し、その後減少して2002年に0.71となった。2003年以降は再び増加し、2015年に過去最高となる1.77を示した。2016年以降は減少傾向が継続しており、2024年は0.95となった。これらのことから、2025年度資源評価において、減少傾向にあると判断されている。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

本予測期間（2026年1月～6月）は、前半は1歳魚（2025年級群）主体の漁況になると推測されるため、2025年後半期（7月～11月）の漁況等から、1歳魚の来遊量を予測した。後半には0歳魚（2026年級群）が加入するが、現時点での予測は困難である。

予報対象海域である鹿児島県～三重県における2025年1月～11月の主要港漁獲量は21.5千トンと前年同期（21.7千トン）並であった。予測対象海域の主要港における前半期（1月～6月）漁獲量と後半期（8月～12月）漁獲量には正の関係がある。後半期（7月～11月）漁獲量と翌年前半期（1月～6月）漁獲量にも、弱いながらも統計的に有意な正の関係がある。2000年～2024年の後半期（7月～11月）漁獲量と翌年前半期（1月～6月）漁獲量との関係を用いて、2025年7月～11月の漁獲量（18.3千トン）から予測した2026年前半期（1月～6月）の漁獲量は7.9千トンであった。これは2025年同期漁獲量（3.2千トン）の248%に相当する。この関係に基づくと、2026年前半期（1月～6月）の来遊量は前年を上回ると予測される。

北薩～薩南海域では、1月～4月は1歳以上（15cm～20cm）、5月～6月は0歳魚（7cm～10cm）が主体となる。1月～4月に漁獲の主体となる1歳以上の漁況から、来遊量は前年並と予測される。

日向灘では、1月～3月は1歳魚（15cm～20cm）、4月～6月は0歳魚（9cm～14cm）が主体となる。2025年7月～10月の漁獲量は前年を下回ったが、11月にまとまった漁獲があった。来遊が遅れた一因として、低水温であったことが挙げられる。1月～6月の水温は前年同様に平年並で推移する予測であることから、来遊量は前年並と予測される。

豊後水道南部西側では、1月～3月は1歳魚（15cm～20cm）、4月～6月は0歳魚（10cm前後）が主体となる。2025年7月～11月の漁獲の主体は2025年級群であり、2026年はこれらの個体が1歳魚となり漁獲される。この期間の漁況から、来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道東側では、加入時期にあたる4月～6月から0歳魚（5cm～10cm）が主体となる。近年は近隣海

域における推定産卵量や資源量指標に大きな変化がないことなどから、来遊量は前年並と予測される。

宿毛湾・土佐湾では、宿毛湾中型まき網が主体であり、0歳魚、1歳以上が漁獲される。宿毛湾中型まき網における1月～6月の漁獲量と前年7月～12月の漁獲量には正の関係がみられる。この関係式から、来遊量は前年を上回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、定置網において0歳魚(5cm～10cm)が主体に混獲される。2025年7月～11月の漁況から、来遊量は好調であった前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、定置網および棒受網による漁獲量は減少傾向であるが、黒潮が潮岬を接岸基調で推移した場合、漁場形成条件は良いと考えられる。これらのことから、来遊量は前年を上回ると予測される。

熊野灘では1歳魚(20cm前後)が主体となる。近年、冬春季の成魚の来遊量は期間、量ともに減少傾向が続いている。1歳魚の来遊量は、2025年7月～11月の漁況から、前年を下回ると予測される。なお、熊野灘ではサバ類など他に優先的に獲るものがあればウルメイワシは積極的に漁獲されないため、漁獲が来遊を反映しない可能性もある。

マアジ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2026年1月～6月）

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2026年級群）、1歳魚（2025年級群）、
2歳魚（2024年級群）、3歳魚（2023年級群）以上。
年初に加齢、魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：北薩～薩南海域、日向灘、豊後水道南部西側では前年を下回る。豊後水道東側では前年並。宿毛湾・土佐湾では前年を上回る。
- (2) 魚体：北薩～薩南海域では1歳魚、2歳魚が主体、日向灘、豊後水道南部西側では1歳魚が主体、豊後水道東側では0歳魚が主体、宿毛湾・土佐湾では0歳魚、1歳魚が主体。0歳魚は14cm以下、1歳魚は14cm～20cm、2歳以上は20cm以上。

2. 紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：紀伊水道外域西部では前年並。紀伊水道外域東部では前年を上回る。熊野灘では前年並～上回る。
- (2) 魚体：紀伊水道外域西部では0歳魚が主体、紀伊水道外域東部では1歳魚、2歳魚が主体、熊野灘では1歳魚が主体で0歳魚および2歳以上が混じる。0歳魚は12cm以下、1歳魚は12cm～21cm、2歳以上は21cm以上。

3. 相模湾（定置網）

- (1) 来遊量：伊豆東岸では前年を下回る。西湘地区では前年並。
- (2) 魚体：1歳魚が主体で14cm～22cm。

漁況の経過（2025年7月～11月）および見通し（2026年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1986年以降増加し、1990年代半ばは15万トン～16万トンと高い水準で推移したが、1997年以降は減少傾向に転じ、2015年には4.4万トンまで減少した。その後は横ばい傾向を示している。加入量は1993年をピークに減少し、2009年以降2.8億尾～7.1億尾と低い水準で推移している。令和7年度（2025年度）資源評価において、2024年の資源量は5.7万トン、親魚量は2.2万トンと推定された。3歳魚（2023年級群）の加入量は7.1億尾と推定された。2025年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ないと考えられる。2歳魚（2024年級群）の加入量は、2023年級群と同程度であり、7.1億尾と推定された。2025年前半の漁獲の主体となつたが、2025年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ないと考えられる。1歳魚（2025年級群）の加入量を現時点で推定することは難しいが、4月～11月の指標値の相乗平均は2024年級群を上回った。各県地先の加入量指標値は、宇和島港まき網ゼンゴCPUE（4月～11月）、串本棒受網0歳魚漁獲量（5月～6月）、千葉県定置網0歳魚漁獲量（10月～11月）では前年を上回っているが、宮崎県南部定置網アジ仔CPUE（4月～6月）、宿毛湾まき網ゼンゴCPUE（4月～11月）、伊勢湾小型

底びき網（まめ板）0歳魚漁獲量（4月～11月）、伊豆東岸定置網0歳魚漁獲量は前年を下回っている。0歳魚（2026年級群）は期後半から漁獲されると考えられるが、現時点で推定することは難しい。

2. 来遊量・漁期・漁場、魚体

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに前期（2025年7月～11月）の漁況に基づき予測した。年齢別尾叉長は、これまでの尾叉長組成の推移から概ね次のとおりである。0歳魚（2026年級群）：14cm以下、1歳魚（2025年級群）：15cm～20cm、2歳魚（2024年級群）：21cm～24cm、3歳魚（2023年級群）以上：25cm以上。3歳以上の年齢に対応した尾叉長区分は現状では困難である。なお近年の報告によると、相模湾以東では20cm台に3歳～10歳以上の高齢魚がみられることが明らかになってきている。

（1）北薩～土佐湾

北薩～薩南海域では、1歳魚、2歳魚（2025年級群、2024年級群）が漁獲の主体となる。1月～6月の漁獲量は、前年11月の漁獲量と正の関係が認められる。それらの関係から、1月～6月の来遊量は前年を下回ると予測される。

日向灘では、1歳魚（2025年級群）が漁獲の主体となる。7月～11月の漁獲量は前年を下回っており、近隣県の来遊状況からも日向灘における2026年1月～6月の来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、1歳魚（2025年級群）が漁獲の主体となる。2026年は2025年7月～11月に水揚げされた2025年級群が1歳魚となり漁獲される可能性がある。0歳魚（2025年級群）が水揚げの主体であった2025年7月～11月のまき網水揚量が前年を下回ったことから、来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道東側では、例年だと5月ごろから0歳魚の漁獲が始まる。0歳魚（2026年級群）の来遊量の予測は難しいが、マアジ太平洋系群の親魚量は減少傾向にあるとともに、当該海域には東シナ海由来の0歳魚が一部来遊するとされており、東シナ海の親魚量は横ばい傾向にある。また、2025年7月～11月の水揚量が各海域ともに豊漁であった前年を大きく下回ったものの、近年比では100%を超えていていることから、0歳魚の来遊量は前年並と予測される。

宿毛湾・土佐湾では、0歳魚と1歳魚（2026年級群、2025年級群）が主体となる。宿毛湾中型まき網における下半期（7月～12月）の水揚量と翌年上半期（1月～6月）の水揚量には有意な正の関係が認められ、その関係から、来遊量は前年を上回ると予測される。

（2）紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、0歳魚（2026年級群）が主体となり、7月～11月の漁況は前年並であったことから、来遊量は前年並と予測される。

紀伊水道外域東部では、1歳魚、2歳魚（2025年級群、2024年級群）が漁獲の主体となる。1月～6月の漁獲量は、前年7月～11月の漁獲量と有意な正の関係が認められ、その関係から、2026年1月～6月の

来遊量は前年を上回ると予測される。

熊野灘では、1歳魚が主体で、0歳魚及び2歳以上も漁獲される。2025年7月～11月の漁況において、まき網で漁獲された0歳魚は前年並、定置網で漁獲された0歳魚は前年を大幅に上回ったことから、予測漁期に漁獲の主体となる1歳魚の来遊量は前年並～上回ると予測される。

(3) 相模湾

伊豆東岸では、1歳魚（2025年級群）が漁獲の主体となる。5月頃から0歳魚（2026年級群）が漁獲される。月別尾叉長組成と漁獲量から推定した4月～11月の0歳魚の推定漁獲尾数と翌年1月～6月の1歳以上の推定漁獲尾数との間には正の関係が認められ、この関係から、予測漁期に漁獲の主体となる1歳魚の来遊量は前年を下回ると予測される。

西湘地区では、4月～6月を中心に1歳魚が漁獲される。2023年下半期の0歳魚（2023年級群）の好漁以降、2024年、2025年と上半期の豊漁が続いている。西湘地区における5月～11月の0歳魚漁獲量は、2023年以降減少しているが、2010年代と比較すると多い。また、2025年下半期は、1歳魚（2024年級群）以上が多かった。よって、2026年上半期は、1歳魚（2025年級群）に加え、2歳魚（2024年級群）以上の産卵親魚も多いと思われることから、来遊量は好調であった前年並と予測される。

(4) 房総～三陸海域等の漁獲情報

房総～鹿島灘海域における北部まき網の2025年7月～11月の漁獲量は1,030トン（TACシステム）と、不調であった前年同期121トンを大きく上回った。

仙台湾～三陸海域等では、宮城県の2025年7月～11月の漁獲量は918トンで前年を下回った。岩手県の2025年7月～11月の定置網による漁獲量は135トンで前年を下回った。青森県では2025年7月～11月の八戸の漁獲量は47トンで前年を上回り、平館の定置網による漁獲量は12トンで前年を上回った。

マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2026年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域

対象漁業：まき網、定置網、底曳網、棒受網、たもすくい等

対象魚群：1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）、3歳魚（2023年級群）、

4歳魚（2022年級群）、5歳魚（2021年級群）、6歳魚（2020年級群）以上。

年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～日向灘～豊後水道南部～土佐湾（まき網、定置網等）

(1) 来遊量：マサバは豊後水道南部では前年並～下回る。ゴマサバは北薩～薩南海域では前年並、日向灘では前年を下回り、豊後水道南部西側では前年並～下回り、豊後水道南部東側では前年並～上回り、土佐湾では前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは豊後水道南部西側では25cm～35cm（1歳以上）主体、豊後水道南部東側では10cm～30cm（0歳魚、1歳魚）主体。ゴマサバは北薩～薩南海域では20cm～37cm（1歳魚～3歳魚）主体、日向灘では13cm～36cm（0歳魚～3歳魚）主体、豊後水道南部では10cm～30cm（0歳魚、1歳魚）主体、土佐湾では31cm～38cm（3歳魚～5歳魚）主体。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは紀伊水道外域西部では低調であった前年を上回り、紀伊水道外域東部では前年を下回る。ゴマサバは混獲される程度。サバ類全体としては前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは紀伊水道外域西部の定置網では5cm～15cm（0歳魚）主体、紀伊水道外域東部のまき網では26cm～36cm（2歳魚、3歳魚）主体。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低水準、ゴマサバは前年を上回るが低水準。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは30cm～40cm（2歳以上）主体、ゴマサバは30cm～40cm（2歳以上）主体に20cm～30cm（1歳魚）が漁獲される。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

(1) 来遊量：マサバおよびゴマサバは低水準であった前年並。

(2) 漁期・漁場：マサバは伊豆諸島北部海域が主漁場となるが、漁期当初は三宅島周辺海域にも漁場が形成される可能性がある。ゴマサバは三宅島周辺海域が主漁場となる。

(3) 魚体：マサバは27cm～36cm（3歳魚、4歳魚）主体に、31cm以上（5歳以上）も漁獲される。ゴマサバは29cm（3歳以上）主体に24cm～34cm（2歳魚）が漁獲される。

5. 犬吠埼沖～三陸海域（まき網、定置網、底曳網）

(1) 来遊量：マサバはまき網では極めて低調であった前年並、定置網、底曳網では前年を下回る。ゴマサバは混獲される程度で低水準。サバ類全体としては低調であった前年並。

(2) 漁期・漁場：まき網では期を通じて犬吠埼沖～常磐南部海域が主漁場となり、期後半には三陸南部海域にも漁場が形成される。三陸海域の定置網、底曳網ではマサバは1月、2月および4月以降に漁獲され、ゴマサバは5月以降に漁獲される。

(3) 魚体：マサバは期を通じて25cm～38cm（3歳魚、4歳魚）主体に、18cm～30cm（1歳魚、2歳魚）、28cm以上（5歳以上）も漁獲される。

漁況の経過（2025年7月～11月）および見通し（2026年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

1) マサバ

資源量は1990年代～2000年代前半に極めて低い水準にあったが、2013年の高い加入量により2013年に急増した。その後、2018年の高い加入量により資源量は2019年まで横ばい傾向を示したが、2020年以降は減少傾向を示している。2013年級群の発生以降、成長および成熟の遅れがみられている。

2020年級群（6歳魚）は、2025年12月時点の資源評価（状態空間資源評価モデル（SAM））による推定加入量が80億尾と近年（2015年～2024年）の平均（72億尾）程度の水準である。

2021年級群（5歳魚）は、推定加入量が81億尾と近年の平均程度の水準である。

2022年級群（4歳魚）は、推定加入量が72億尾と近年の平均程度の水準である。

2023年級群（3歳魚）は、推定加入量が31億尾と近年の平均を下回る水準である。

2024年級群（2歳魚）は、推定加入量が30億尾と近年の平均を下回る水準である。

2025年級群（1歳魚）の加入量は、北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所、6月～7月）および再生産関係から、近年の平均を下回る水準と推定されている。

2) ゴマサバ

資源量は2004年～2011年に高い水準にあったが、2011年以降、減少傾向を示し、2020年の資源量は、資源量を推定している1995年以降で最低水準となった。2021年以降は緩やかな増加傾向を示しているが、依然として低水準にある。

2021年級群（5歳魚）は、2025年12月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が4.1億尾と近年の平均（4.3億尾）程度の水準であり、残存資源量は高齢となって少なくなっている。

2022年級群（4歳魚）は、推定加入量が5.3億尾と近年の平均を上回る水準である。

2023年級群（3歳魚）は、推定加入量が4.9億尾と近年の平均程度の水準である。

2024年級群（2歳魚）は、推定加入量が3.1億尾と近年の平均を下回る水準である。

2025年級群（1歳魚）の加入量は、再生産関係から近年の平均を上回る水準と推定されている。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態を基にすると、1歳魚（2025年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は前年並となる。2歳魚（2024年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年並となる。3歳魚（2023年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。4歳魚（2022年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年並となる。5歳魚（2021年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年並となる。6歳魚（2020年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年を上回る。2025年4月に黒潮大蛇行が終息し、その後、常磐・三陸海域における黒潮続流の極端な北偏・接岸による顕著な高温化も解消された。海洋環境に変化が見られるものの、資源状態および直近の漁況を考慮すると、マサバの来遊量は、犬吠埼以北のまき網ではマイワシの漁獲状況にもよるが、極めて低調であった前年並、三陸海域の定置網、底曳網では前年を下回り、伊豆諸島周辺海域では前年並、紀伊水道外域西部では低調であった前年を上回り、紀伊水道外域東部では前年を下回り、豊後水道南部では前年並～下回り、熊野灘では低水準となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

犬吠埼以北海域でのまき網漁業では、7月～9月は三陸北部海域および犬吠埼沖で漁獲がみられたが、漁模様は低調に推移した。10月は三陸北部海域および常磐海域、犬吠埼沖でややまとまった漁獲がみられたが、11月は低調であった。道東沖では漁獲されなかった。7月～11月の漁獲量は、犬吠埼以北海域におけるまき網では0.9万トンと前年同期(1.3万トン)を下回り、千葉県以北の定置網・底曳網等では1.2万トンと前年同期(1.4万トン)を下回り、伊豆諸島以西の海域では2.6千トンと前年同期(3.3千トン)を下回った。(漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値)

本予測期間における各地の漁期・漁場および魚体は以下のとおり。犬吠埼以北海域のまき網では、期を通じて犬吠埼沖～常磐南部海域が主漁場となり、期後半には三陸南部海域にも漁場が形成される。期を通じて3歳魚、4歳魚主体に、1歳魚、2歳魚、5歳以上も漁獲される。三陸海域の定置網、底曳網では1月、2月および4月以降、3歳魚、4歳魚主体に、1歳魚、2歳魚、5歳以上も漁獲される。伊豆諸島周辺海域では3歳魚、4歳魚主体に5歳以上も漁獲される。漁場は、資源量水準によって変化すると考えられる。近年の資源量の低下傾向から、伊豆諸島北部海域に主漁場が形成される。ただし、黒潮流路によっては、漁期当初に三宅島周辺で漁場が形成される可能性もある。熊野灘、土佐湾、日向灘、北薩～薩南海域では混獲程度、紀伊水道外域ではマサバ主体の漁場形成がみられ、豊後水道南部では昨年同様にマサバ主体の漁場形成が一時的にみられる。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚(2025年級群)：27cm以下、2歳魚(2024年級群)：23cm～33cm、3歳魚(2023年級群)：25cm～36cm、4歳魚(2022年級群)：27cm～38cm、5歳魚(2021年級群)：30cm～40cm、6歳魚(2020年級群)以上：32cm以上。(各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている)

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態を基にすると、1歳魚(2025年級群)は、加入量が近年の平均を上回る水準と考えられ、来遊量は前年を上回る。2歳魚(2024年級群)は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。3歳魚(2023年級群)は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年並となる。4歳魚(2022年級群)以上は残存資源量が少なくなっている。ゴマサバの来遊量は、北薩～薩南海域では前年並、日向灘では前年を下回り、豊後水道南部西側では前年並～下回り、豊後水道南部東側では前年並～上回り、土佐湾では前年並、紀伊水道外域では混獲される程度、熊野灘では前年を上回るが低水準、伊豆諸島周辺海域では低調であった前年並、犬吠埼以北のまき網、三陸海域の定置網では混獲される程度で低水準となる。全体の来遊量としては低水準となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

7月～11月の漁獲量は、北薩～紀伊水道外域では3.5千トンと前年同期(3.1千トン)並、熊野灘では1.9千トンと前年同期(0.8千トン)を上回り、伊豆諸島周辺海域では2.8千トンと前年同期(1.3千トン)を上回り、犬吠埼以北海域のまき網では0.2千トンと前年同期(1.3千トン)を下回り、千葉県以北の定置網・底曳網等では2.6千トンと前年同期(6.6千トン)を下回った。

本予測期間における各地の漁期・漁場および魚体は、北薩～薩南海域では1歳魚～3歳魚主体、日向灘では0歳魚～3歳魚主体、豊後水道南部では0歳魚、1歳魚主体、土佐湾では3歳魚～5歳魚主体、熊野灘では2歳以上主体に1歳魚が混じり、期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では3歳以上主体に2歳魚が混じり、期を通じて三宅島周辺海域が主漁場となる。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚(2025年級群)：30cm以下、2歳魚(2024年級群)：24cm～33cm、3歳魚(2023年級群)：28cm～

37 cm、4歳魚（2022年級群）：33 cm～38 cm、5歳魚（2020年級群）以上：34 cm以上。（各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている）

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
宮城県水産技術総合センター	高知県水産試験場
福島県水産海洋研究センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
茨城県水産試験場	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
千葉県水産総合研究センター	宮崎県水産試験場
東京都島しょ農林水産総合センター	鹿児島県水産技術開発センター
神奈川県水産技術センター	
静岡県水産・海洋技術研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
三重県水産研究所	